

## 8-6-2 温室効果ガス

工事の実施（建設機械の稼働、資材及び機械の運搬に用いる車両の運行、建設資材の使用及び廃棄物の発生）及び鉄道施設（駅、車両基地、換気施設）の供用により、温室効果ガスが発生することから、環境影響評価を行った。

### (1) 予測及び評価

#### 1) 工事の実施

##### ア. 予測

##### ア) 予測項目

予測項目は、工事の実施による温室効果ガスとした。

##### イ) 予測の基本的な手法

工事の実施において建設機械の稼働、資材及び機械の運搬に用いる車両の運行、建設資材の使用及び廃棄物の発生に伴う温室効果ガス排出量を積算する方法により定量的に検討し、温室効果ガス排出量の削減への取り組みを勘案して定性的に予測した。予測対象とした温室効果ガスの対象物質は、工事の実施において建設機械の稼働、資材及び機械の運搬に用いる車両の運行、建設資材の使用及び廃棄物の発生により発生する二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>)、メタン (CH<sub>4</sub>) 及び一酸化二窒素 (N<sub>2</sub>O) の 3 物質とした。温室効果ガス排出量は、二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) 換算で算出した。

##### ウ) 予測地域

予測地域は、対象事業実施区域とした。

##### エ) 予測対象時期

予測対象時期は、工事期間中とした。

##### オ) 予測結果

工事の実施に伴う温室効果ガス排出量の予測結果を以下に示す。

##### ア) 建設機械の稼働

建設機械の稼働に伴う温室効果ガス排出量を表 8-6-2-1 に示す。

表 8-6-2-1(1) 建設機械の稼働に伴う温室効果ガス(CO<sub>2</sub>)排出量

建設機械等		延べ 燃料消費量 (L)	CO <sub>2</sub> 排出係数 (kgCO <sub>2</sub> /L)	CO <sub>2</sub> 排出量 (tCO <sub>2</sub> )
機械名	燃料			
ブルドーザ等	軽油	570,000	2.58	1,471
掘削及び積込機	軽油	6,000,000	2.58	15,480
運搬機械	軽油	13,000,000	2.58	33,540
クレーンその他の荷役機械	軽油	18,000,000	2.58	46,440
基礎工事用機械	軽油	1,900,000	2.58	4,902
せん孔機械及びトンネル工事用機械	軽油	77,000,000	2.58	198,660
モータグレーダ及び路盤用機械	軽油	17,000	2.58	44
締固め機械	軽油	430,000	2.58	1,109
コンクリート機械	軽油	11,000,000	2.58	28,380
舗装機械	軽油	10,000	2.58	26
道路維持用機械	軽油	25,000	2.58	65
空気圧縮機及び送風機	軽油	180,000	2.58	464
建設用ポンプ	軽油	15,000	2.58	39
電気機器	軽油	310,000	2.58	800
その他の機器	軽油	9,300	2.58	24
合計 (CO <sub>2</sub> 総排出量) (tCO <sub>2</sub> )				331,443

注 1. 「CO<sub>2</sub>排出係数」は、「地球温暖化対策の推進に関する法律施行令」(平成 22 年政令第 20 号)別表第 1 より算出した。

表 8-6-2-1(2) 建設機械の稼働に伴う温室効果ガス(N<sub>2</sub>O)排出量 (CO<sub>2</sub>換算)

建設機械等		延べ 燃料消費量 (L)	N <sub>2</sub> O 排出係数 (kgN <sub>2</sub> O/L)	地球 温暖化 係数	CO <sub>2</sub> 排出量 (tCO <sub>2</sub> )
機械名	燃料				
ブルドーザ等	軽油	570,000	0.000064	310	11.3
掘削及び積込機	軽油	6,000,000	0.000064	310	119.0
運搬機械	軽油	13,000,000	0.000064	310	257.9
クレーンその他の荷役機械	軽油	18,000,000	0.000064	310	357.1
基礎工事用機械	軽油	1,900,000	0.000064	310	37.7
せん孔機械及びトンネル工事用機械	軽油	77,000,000	0.000064	310	1527.7
モータグレーダ及び路盤用機械	軽油	17,000	0.000064	310	0.3
締固め機械	軽油	430,000	0.000064	310	8.5
コンクリート機械	軽油	11,000,000	0.000064	310	218.2
舗装機械	軽油	10,000	0.000064	310	0.2
道路維持用機械	軽油	25,000	0.000064	310	0.5
空気圧縮機及び送風機	軽油	180,000	0.000064	310	3.6
建設用ポンプ	軽油	15,000	0.000064	310	0.3
電気機器	軽油	310,000	0.000064	310	6.2
その他の機器	軽油	9,300	0.000064	310	0.2
合計 (CO <sub>2</sub> 総排出量) (tCO <sub>2</sub> )					2,548.8

注 1. 「N<sub>2</sub>O 排出係数」は、「地球温暖化対策の推進に関する法律施行令」別表第 1 より算出した。

表 8-6-2-1(3) 建設機械の稼働に伴う温室効果ガス(CO<sub>2</sub>)排出量

	延べ電力消費量 (kWh)	CO <sub>2</sub> 排出係数 (kgCO <sub>2</sub> /kWh)	CO <sub>2</sub> 排出量 (tCO <sub>2</sub> )
トンネルの工事	93,000,000	0.518	48,174
合計 (CO <sub>2</sub> 総排出量) (tCO <sub>2</sub> )			48,174

注1. 「CO<sub>2</sub>排出係数」は、電気使用者別CO<sub>2</sub>排出係数(平成23年度実績)の中部電力株式会社の値を用いた。

b) 資材及び機械の運搬に用いる車両の運行

資材及び機械の運搬に用いる車両の運行に伴う温室効果ガス排出量を表 8-6-2-2 に示す。

表 8-6-2-2(1) 資材及び機械の運搬に用いる車両の運行に伴う温室効果ガス(CO<sub>2</sub>)排出量

車種分類等		車種別燃料 種別走行量 (km/台)	延べ 車両台数 (台)	車種別 燃費 (km/L)	燃料 使用量 (L)	CO <sub>2</sub> 排出係数 (kg CO <sub>2</sub> /L)	CO <sub>2</sub> 排出量 (tCO <sub>2</sub> )
工事用車両	軽油	50	2,700,000	3.09	43,689,320	2.58	112,718
合計							112,718

注1. 車種別燃費は、「貨物輸送業者に行わせる貨物の輸送に係るエネルギーの使用量の算定」(平成18年 経済産業省告示第66号)に示された8,000kg以上10,000kg未満の値を用いた。

注2. 「CO<sub>2</sub>排出係数」は、「地球温暖化対策の推進に関する法律施行令」別表第1より算出した。

表 8-6-2-2(2) 資材及び機械の運搬に用いる車両の運行に伴う  
温室効果ガス(CH<sub>4</sub>)排出量(CO<sub>2</sub>換算)

車種分類等		車種別燃料 種別走行量 (km/台)	延べ 車両台数 (台)	CH <sub>4</sub> 排出係数 (kgCH <sub>4</sub> /km)	CH <sub>4</sub> 排出量 (kgCH <sub>4</sub> )	地球 温暖化 係数	CO <sub>2</sub> 排出量 (tCO <sub>2</sub> )
工事用車両	軽油	50	2,700,000	0.000015	2,025	21	43
合計							43

注1. 「CH<sub>4</sub>排出係数」及び「地球温暖化係数」は、「地球温暖化対策の推進に関する法律施行令」に示された値を用いた。

表 8-6-2-2(3) 資材及び機械の運搬に用いる車両の運行に伴う  
温室効果ガス(N<sub>2</sub>O)排出量(CO<sub>2</sub>換算)

車種分類等		車種別燃料 種別走行量 (km/台)	延べ 車両台数 (台)	N <sub>2</sub> O 排出係数 (kgN <sub>2</sub> O/km)	N <sub>2</sub> O 排出量 (kgN <sub>2</sub> O)	地球 温暖化 係数	CO <sub>2</sub> 排出量 (tCO <sub>2</sub> )
工事用車両	軽油	50	2,700,000	0.000014	1,890	310	586
合計							586

注1. 「N<sub>2</sub>O排出係数」及び「地球温暖化係数」は、「地球温暖化対策の推進に関する法律施行令」に示された値を用いた。

c) 建設資材の使用

建設資材の使用に伴う温室効果ガス排出量を表 8-6-2-3 に示す。

表 8-6-2-3 建設資材の使用に伴う温室効果ガス (CO<sub>2</sub>) 排出量

分類項目		資材の使用量 (kg, m <sup>3</sup> )	資材の CO <sub>2</sub> 排出係数 (kg CO <sub>2</sub> /kg, kg CO <sub>2</sub> /m <sup>3</sup> )	CO <sub>2</sub> 排出量 (tCO <sub>2</sub> )
木材	合板	7,400,000	0.1903	1,408
砕石		72,000,000	0.00693	499
セメント	生コンクリート	1,900,000	311.3	591,470
	ポルトランドセメント	4,300	0.836	4
鉄鋼	高炉製熱間圧延鋼材	200,000,000	1.507	301,400
内装仕上材		3,500,000	1.75	6,125
外装材等		13,000,000	0.93	12,090
合 計 (CO <sub>2</sub> 総排出量) (tCO <sub>2</sub> )				912,996

注 1. 「資材の排出係数」は、名古屋環境影響評価技術指針マニュアル (温室効果ガス等) (平成 19 年) を用いた。

注 2. 生コンクリートの使用量の単位は「m<sup>3</sup>」、それ以外は「kg」である。

注 3. 内装仕上材及び外装材等は、排出原単位が公表されていないため、他事例を参考に混在する資材の比率等から想定した。

d) 廃棄物の発生

廃棄物の発生に伴う温室効果ガス排出量を表 8-6-2-4 に示す。

表 8-6-2-4 廃棄物の発生に伴う温室効果ガス (CO<sub>2</sub>) 排出量

分類項目		廃棄物の焼却・埋立処理量 (t)	焼却・埋立による排出係数 (kgCO <sub>2</sub> /t、 kgCH <sub>4</sub> /t、 kgN <sub>2</sub> O/t)	地球温暖化係数	CO <sub>2</sub> 換算排出量 (kgCO <sub>2</sub> )	合計 (tCO <sub>2</sub> )	
焼却	CO <sub>2</sub>	廃プラスチック	3,160	2.770	1	8,753,200	8,753
	N <sub>2</sub> O	廃プラスチック	3,160	0.17	310	166,532	
		紙くず	1,110	0.01	310	3,441	
		木くず	54,000	0.01	310	167,400	
埋立	CH <sub>4</sub>	紙くず	1,110	136	21	3,170,160	174,404
		木くず	54,000	151	21	171,234,000	
合計 (CO <sub>2</sub> 換算総排出量) (tCO <sub>2</sub> )						183,494	

注 1. 「排出係数」及び「地球温暖化係数」は、「地球温暖化対策の推進に関する法律施行令」(平成 22 年政令第 20 号) に示された値を用いた。

注 2. 廃プラスチック、紙くずの焼却・埋立処分量は、建設廃材の発生量から、「建築系混合廃棄物の原単位調査報告書」(社団法人 日本建設業連合会、平成 24 年) に示す平成 22 年における品目別中間処理量の構成比 (廃プラスチック:17%、紙くず:6%) により算出した値とした。

注 3. 木くずの焼却・埋立処分量は、コンクリート工事等の型枠に用いる木材と事業実施区域内の造成等による森林伐採によって発生する木材を合算した量とした。

e) 工事の実施に伴い発生する温室効果ガス

工事の実施（建設機械の稼働、資材及び機械の運搬に用いる車両の運行、建設資材の使用及び廃棄物の発生）に伴い発生する温室効果ガス排出量を表 8-6-2-5 に示す。また、この数量は関係法令により定められている排出係数等から算出したものである。適切な環境保全措置を実施することにより更なる低減が図られると予測する。

表 8-6-2-5 工事の実施に伴い発生する温室効果ガス（CO<sub>2</sub>換算）排出量

区分		温室効果ガス（CO <sub>2</sub> 換算）排出量（tCO <sub>2</sub> ）		
		小計	行為別合計	
建設機械の稼働	燃料消費（CO <sub>2</sub> ）	330,000	380,500	
	燃料消費（N <sub>2</sub> O）	2,500		
	電力消費（CO <sub>2</sub> ）	48,000		
資材及び機械の運搬に用いる車両の運行	CO <sub>2</sub>	110,000	110,633	
	CH <sub>4</sub>	43		
	N <sub>2</sub> O	590		
建設資材の使用	CO <sub>2</sub>	910,000	910,000	
廃棄物の発生	焼却	CO <sub>2</sub>	8,800	179,140
		N <sub>2</sub> O	340	
	埋立	CH <sub>4</sub>	170,000	
合計（CO <sub>2</sub> 換算総排出量）（tCO <sub>2</sub> ）			1,580,273	
年間 CO <sub>2</sub> 排出量（平均）（tCO <sub>2</sub> /年）			112,876	

注1. 工事期間は14年とし、1年間あたり温室効果ガス排出量（平均）を算定した。

イ. 環境保全措置の検討

7) 環境保全措置の検討の状況

本事業では、計画の立案の段階において、温室効果ガスに係る環境影響を回避又は低減するため「低炭素型建設機械の選定」、「高負荷運転の抑制」及び「低燃費車種の選定、積載の効率化、運搬計画の合理化による運搬距離の最適化」について検討した。さらに、事業者により実行可能な範囲内で、工事の実施（建設機械の稼働、資材及び機械の運搬に用いる車両の運行、建設資材の使用及び廃棄物の発生）による温室効果ガスに係る環境影響を回避又は低減することを目的として、環境保全措置の検討を行った。

環境保全措置の検討の状況を表 8-6-2-6 に示す。

表 8-6-2-6 環境保全措置の検討の状況

環境保全措置	実施の適否	適否の理由
低炭素型建設機械の選定	適	低炭素型建設機械（例えば油圧ショベルではCO <sub>2</sub> 排出量が従来型に比べ10%低減）の採用により、温室効果ガスの排出量を低減できることから、環境保全措置として採用する。
高負荷運転の抑制	適	建設機械の高負荷運転を抑制することにより、温室効果ガスの排出量を低減できることから、環境保全措置として採用する。
工事規模に合わせた建設機械の設定	適	工事規模に合わせて必要以上の建設機械の規格、配置及び稼働とならないように計画することで、温室効果ガスの排出量を低減できることから、環境保全措置として採用する。
建設機械の点検・整備による性能維持	適	法令上の定めによる定期的な点検や日々の点検・整備により建設機械の性能を維持することで、温室効果ガスの排出量を低減できることから、環境保全措置として採用する。
資材及び機械の運搬に用いる車両の点検・整備による性能維持	適	法令上の定めによる定期的な点検や日々の点検・整備により資材及び機械の運搬に用いる車両の性能を維持することで、温室効果ガスの排出量を低減できることから、環境保全措置として採用する。
低燃費車種の選定、積載の効率化、運搬計画の合理化による運搬距離の最適化	適	低燃費車種の選定、積載の効率化、合理的な運搬計画の策定による運搬距離の最適化等により、温室効果ガスの排出量を低減できることから、環境保全措置として採用する。
工事従事者への講習・指導	適	建設機械の高負荷運転の抑制、建設機械の点検・整備による性能維持、資材及び機械の運搬に用いる車両の点検・整備による性能維持について、工事従事者への講習・指導を実施することにより、温室効果ガスの低減が見込まれることから、環境保全措置として採用する。
副産物の分別・再資源化	適	場内で細かく分別し、再資源化に努めることで、取り扱う副産物（廃棄物含む）の量を低減できることから、温室効果ガスの排出量を低減できるため、環境保全措置として採用する。

4) 環境保全措置の実施主体、方法その他の環境保全措置の実施の内容

本事業では、工事の実施（建設機械の稼働、資材及び機械の運搬に用いる車両の運行、建設資材の使用及び廃棄物の発生）による温室効果ガスに係る環境影響を低減させるため、環境保全措置として「低炭素型建設機械の選定」、「高負荷運転の抑制」、「工事規模に合わせた建設機械の設定」、「建設機械の点検・整備による性能維持」、「資材及び機械の運搬に用いる車両の点検・整備による性能維持」、「低燃費車種の選定、積載の効率化、運搬計画の合理化による運搬距離の最適化」、「工事従事者への講習・指導」及び「副産物の分別・再資源化」を実施する。

環境保全措置の内容を表 8-6-2-7 に示す。

表 8-6-2-7(1) 環境保全措置の内容

実施主体	東海旅客鉄道株式会社	
実施内容	種類・方法	低炭素型建設機械の選定
	位置・範囲	工事施工範囲内
	時期・期間	工事中
環境保全措置の効果	低炭素型建設機械（例えば油圧ショベルではCO <sub>2</sub> 排出量が従来型に比べ10%低減）の採用により、温室効果ガスの排出量を低減できる。	
効果の不確実性	なし	
他の環境への影響	なし	

**表 8-6-2-7(2) 環境保全措置の内容**

実施主体	東海旅客鉄道株式会社	
実施内容	種類・方法	高負荷運転の抑制
	位置・範囲	工事施工範囲内
	時期・期間	工事中
環境保全措置の効果	建設機械の高負荷運転を抑制することにより、温室効果ガスの排出量を低減できる。	
効果の不確実性	なし	
他の環境への影響	なし	

**表 8-6-2-7(3) 環境保全措置の内容**

実施主体	東海旅客鉄道株式会社	
実施内容	種類・方法	工事規模に合わせた建設機械の設定
	位置・範囲	工事施工範囲内
	時期・期間	工事中
環境保全措置の効果	工事規模に合わせて必要以上の建設機械の規格、配置及び稼働とならないように計画することで、温室効果ガスの排出量を低減できる。	
効果の不確実性	なし	
他の環境への影響	なし	

**表 8-6-2-7(4) 環境保全措置の内容**

実施主体	東海旅客鉄道株式会社	
実施内容	種類・方法	建設機械の点検・整備による性能維持
	位置・範囲	工事施工範囲内
	時期・期間	工事中
環境保全措置の効果	法令上の定めによる定期的な点検や日々の点検・整備により建設機械の性能を維持することで、温室効果ガスの排出量を低減できる。	
効果の不確実性	なし	
他の環境への影響	なし	

**表 8-6-2-7(5) 環境保全措置の内容**

実施主体	東海旅客鉄道株式会社	
実施内容	種類・方法	資材及び機械の運搬に用いる車両の点検・整備による性能維持
	位置・範囲	工事施工範囲内
	時期・期間	工事中
環境保全措置の効果	法令上の定めによる定期的な点検や日々の点検・整備により資材及び機械の運搬に用いる車両の性能を維持することで、温室効果ガスの排出量を低減できる。	
効果の不確実性	なし	
他の環境への影響	なし	

**表 8-6-2-7(6) 環境保全措置の内容**

実施主体	東海旅客鉄道株式会社	
実施内容	種類・方法	低燃費車種の選定、積載の効率化、運搬計画の合理化による運搬距離の最適化
	位置・範囲	工事施工範囲内
	時期・期間	工事中
環境保全措置の効果	低燃費車種の選定、積載の効率化、合理的な運搬計画の策定による運搬距離の最適化等により、温室効果ガスの排出量を低減できる。	
効果の不確実性	なし	
他の環境への影響	なし	

表 8-6-2-7(7) 環境保全措置の内容

実施主体	東海旅客鉄道株式会社	
実施内容	種類・方法	工事従事者への講習・指導
	位置・範囲	工事の実施箇所
	時期・期間	工事中
環境保全措置の効果	建設機械の高負荷運転の抑制、建設機械の点検・整備による性能維持、資材及び機械の運搬に用いる車両の点検・整備による性能維持について、工事従事者への講習・指導を実施することにより、温室効果ガスの低減が見込まれる。	
効果の不確実性	なし	
他の環境への影響	なし	

表 8-6-2-7(8) 環境保全措置の内容

実施主体	東海旅客鉄道株式会社	
実施内容	種類・方法	副産物の分別・再資源化
	位置・範囲	工事の実施箇所
	時期・期間	工事中
環境保全措置の効果	場内で細かく分別し、再資源化に努めることで、取り扱う副産物（廃棄物含む）の量を低減できることから、温室効果ガスの排出量を低減できる。	
効果の不確実性	なし	
他の環境への影響	なし	

り) 環境保全措置の効果及び当該環境保全措置を講じた後の環境の変化の状況

環境保全措置の効果を表 8-6-2-7 に示す。環境保全措置を実施することで、温室効果ガスに係る環境影響が低減される。

ウ. 事後調査

予測手法は温室効果ガスの排出量を定量的に予測するものであり、予測の不確実性は小さいこと、また採用した環境保全措置についても効果に係る知見が蓄積されていると判断できることから、環境影響評価法に基づく事後調査は実施しない。



## エ. 評価

### 7) 評価の手法

#### a) 回避又は低減に係る評価

調査・予測結果及び環境保全措置の検討を行った結果について、事業者により実行可能な範囲内で回避又は低減がなされているか、見解を明らかにすることにより行った。

### 1) 評価結果

#### a) 回避又は低減に係る評価

本事業では、工事の実施（建設機械の稼働、資材及び機械の運搬に用いる車両の運行、建設資材の使用及び廃棄物の発生）に伴う温室効果ガスが発生するものの、「低炭素型建設機械の選定」、「高負荷運転の抑制」、「工事規模に合わせた建設機械の設定」、「建設機械の点検・整備による性能維持」、「資材及び機械の運搬に用いる車両の点検・整備による性能維持」、「低燃費車種の選定、積載の効率化、運搬計画の合理化による運搬距離の最適化」、「工事従事者への講習・指導」及び「副産物の分別・再資源化」の環境保全措置を確実に実施することから、温室効果ガスに係る環境影響の低減が図られていると評価する。

## 2) 鉄道施設（駅、車両基地、換気施設）の供用

### ア. 予測

#### 7) 予測項目

予測項目は、鉄道施設（駅、車両基地、換気施設）の供用に伴い発生する温室効果ガス排出量とした。

#### 1) 予測の基本的な手法

鉄道施設（駅、車両基地、換気施設）の供用において、排出される温室効果ガス排出量を積算する方法により定量的に検討し、温室効果ガス排出量の削減への取り組みを勘案して定性的に予測した。予測対象とした温室効果ガスの対象物質は、鉄道施設（駅、車両基地、換気施設）の供用により発生する二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）、メタン（CH<sub>4</sub>）及び一酸化二窒素（N<sub>2</sub>O）の3物質とした。温室効果ガス排出量は、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）換算で算出した。

#### 2) 予測地域

予測地域は、対象事業実施区域の内、温室効果ガスの排出が認められる鉄道施設（駅、車両基地、換気施設）とした。

#### 3) 予測対象時期

予測対象時期は、鉄道施設（駅、車両基地、換気施設）の供用が定常的な状態となる時期とした。

#### 4) 予測結果

鉄道施設（駅、車両基地、換気施設）の供用による温室効果ガス排出量の予測結果を以下に示す。

##### a) 駅施設において使用する設備機器

設備機器の使用に伴う温室効果ガス排出量を表 8-6-2-8 に示す。

表 8-6-2-8(1) 設備機器の使用に伴う温室効果ガス(CO<sub>2</sub>)排出量(駅)

エネルギー	単位	エネルギー消費量 (kWh/年)	CO <sub>2</sub> 排出係数 (kgCO <sub>2</sub> /kWh)	CO <sub>2</sub> 排出量 (tCO <sub>2</sub> /年)
電気	kWh	26,000,000	0.518	13,468
合計 (CO <sub>2</sub> 総排出量) (tCO <sub>2</sub> /年)				13,468

注 1. 電気の使用における「CO<sub>2</sub>排出係数」は、電気使用者別 CO<sub>2</sub>排出係数（平成 23 年度実績）の中部電力株式会社の値を用いた。

表 8-6-2-8(2) 設備機器の使用に伴う温室効果ガス(CO<sub>2</sub>)排出量(駅)

エネルギー	単位	エネルギー消費量 (kL/年)	CO <sub>2</sub> 排出係数 (tCO <sub>2</sub> /kL)	CO <sub>2</sub> 排出量 (tCO <sub>2</sub> /年)
灯油	kL	2,200	2.49	5,478
合計 (CO <sub>2</sub> 総排出量) (tCO <sub>2</sub> /年)				5,478

注 1. 灯油の使用における「CO<sub>2</sub>排出係数」は、「地球温暖化対策の推進に関する法律施行令」別表第 1 より算出した。

b) 駅施設における廃棄物の発生

駅施設における廃棄物の発生に伴う温室効果ガス排出量を表 8-6-2-9 に示す。

表 8-6-2-9 廃棄物の発生に伴う温室効果ガス(CO<sub>2</sub>)排出量

分類項目		廃棄物の焼却 処理量 (t/年)	焼却に よる排出係数 (kgCO <sub>2</sub> /t、 kgCH <sub>4</sub> /t、 kgN <sub>2</sub> O/t)	地球 温暖化 係数	CO <sub>2</sub> 換算 排出量 (kgCO <sub>2</sub> )	合計 (tCO <sub>2</sub> /年)
焼却	CO <sub>2</sub> 廃プラスチック	6	2,770	1	16,620	17
	CH <sub>4</sub> 一般廃棄物(連続燃焼式)	54	0.00095	21	1	0
	N <sub>2</sub> O 廃プラスチック	6	0.17	310	316	1
	N <sub>2</sub> O 一般廃棄物(連続燃焼式)	54	0.0567	310	949	
合計 (CO <sub>2</sub> 換算総排出量) (tCO <sub>2</sub> /年)						18

注 1. 「廃棄物の焼却処理量」は総発生量の内、処分量を過去事例に基づいて算出した。

注 2. 「排出係数」及び「地球温暖化係数」は、「地球温暖化対策の推進に関する法律施行令」(平成 22 年政令第 20 号)に示された値を用いた。

c) 車両基地において使用する設備機器

設備機器の使用に伴う温室効果ガス排出量を表 8-6-2-10 に示す。

表 8-6-2-10(1) 設備機器の使用に伴う温室効果ガス(CO<sub>2</sub>)排出量(車両基地)

エネルギー	単位	エネルギー消費量 (kWh/年)	CO <sub>2</sub> 排出係数 (kgCO <sub>2</sub> /kWh)	CO <sub>2</sub> 排出量 (tCO <sub>2</sub> /年)
電気	kWh	160,000,000	0.518	82,880
合計 (CO <sub>2</sub> 総排出量) (tCO <sub>2</sub> /年)				82,880

注 1. 電気の使用における「CO<sub>2</sub>排出係数」は、電気使用者別 CO<sub>2</sub>排出係数(平成 23 年度実績)の中部電力株式会社の値を用いた。

表 8-6-2-10(2) 設備機器の使用に伴う温室効果ガス(CO<sub>2</sub>)排出量(車両基地)

エネルギー	単位	エネルギー消費量 (kL/年)	CO <sub>2</sub> 排出係数 (tCO <sub>2</sub> /kL)	CO <sub>2</sub> 排出量 (tCO <sub>2</sub> /年)
灯油	kL	20,000	2.49	49,800
合計 (CO <sub>2</sub> 総排出量) (tCO <sub>2</sub> /年)				49,800

注 1. 灯油の使用における「CO<sub>2</sub>排出係数」は、「地球温暖化対策の推進に関する法律施行令」別表第 1 より算出した。

d) 車両基地における廃棄物の発生

車両基地における廃棄物の発生に伴う温室効果ガス排出量を表 8-6-2-11 に示す。

表 8-6-2-11 廃棄物の発生に伴う温室効果ガス(CO<sub>2</sub>)排出量

分類項目		廃棄物の焼却処理量 (t/年)	焼却による排出係数 (kgCO <sub>2</sub> /t、kgCH <sub>4</sub> /t、kgN <sub>2</sub> O/t)	地球温暖化係数	CO <sub>2</sub> 換算排出量 (kgCO <sub>2</sub> )	合計 (tCO <sub>2</sub> /年)	
焼却	CO <sub>2</sub> 廃プラスチック	49	2,770	1	135,730	136	
	CH <sub>4</sub> 一般廃棄物 (連続燃焼式)	420	0.00095	21	8	0	
	N <sub>2</sub> O	廃プラスチック	49	0.17	310	2,582	10
		一般廃棄物 (連続燃焼式)	420	0.0567	310	7,382	
合計 (CO <sub>2</sub> 換算総排出量) (tCO <sub>2</sub> /年)						146	

注1. 「廃棄物の焼却処理量」は総発生量の内、処分量を過去事例に基づいて算出した。

注2. 排出係数及び「地球温暖化係数」は、「地球温暖化対策の推進に関する法律施行令」(平成22年政令第20号)に示された値を用いた。

e) 換気施設において使用する設備機器

設備機器の使用に伴う温室効果ガス排出量を表 8-6-2-12 に示す。

表 8-6-2-12 設備機器の使用に伴う温室効果ガス(CO<sub>2</sub>)排出量 (換気施設)

エネルギー	単位	エネルギー消費量 (kWh/年)	CO <sub>2</sub> 排出係数 (kgCO <sub>2</sub> /kWh)	CO <sub>2</sub> 排出量 (tCO <sub>2</sub> /年)
電気	kWh	14,000,000	0.518	7,400
合計 (CO <sub>2</sub> 総排出量) (tCO <sub>2</sub> /年)				7,400

注1. 電気の使用における「CO<sub>2</sub>排出係数」は、電気使用者別CO<sub>2</sub>排出係数(平成23年度実績)の中中部電力株式会社の値を用いた。

f) 鉄道施設(駅、車両基地、換気施設)の供用に伴い発生する温室効果ガス

鉄道施設(駅、車両基地、換気施設)の供用に伴い発生する温室効果ガスの排出量を表 8-6-2-13 に示す。また、この数量は関係法令により定められている排出係数等から算出したものである。適切な環境保全措置を実施することにより更なる低減が図られると予測する。

表 8-6-2-13 鉄道施設（駅、車両基地、換気施設）の供用に伴い発生する  
温室効果ガス（CO<sub>2</sub>換算）排出量

区分		温室効果ガス（CO <sub>2</sub> 換算）排出量（tCO <sub>2</sub> ）	
		小計	合計
駅施設において使用する設備機器	電気	13,000	18,500
	灯油	5,500	
駅施設における廃棄物	焼却	CO <sub>2</sub>	17
		CH <sub>4</sub>	0
		N <sub>2</sub> O	1
車両基地において使用する設備機器	電気	83,000	133,000
	灯油	50,000	
車両基地における廃棄物	焼却	CO <sub>2</sub>	140
		CH <sub>4</sub>	0
		N <sub>2</sub> O	10
換気施設において使用する設備機器	電気	7,400	7,400
年間 CO <sub>2</sub> 排出量（平均）（tCO <sub>2</sub> /年）			159,068

#### イ. 環境保全措置の検討

##### ア) 環境保全措置の検討の状況

本事業では、計画の立案の段階において、温室効果ガスに係る環境影響を回避又は低減するため「省エネルギー型製品の導入」及び「温室効果ガスの排出抑制に留意した施設の整備及び管理」について検討した。さらに、事業者により実行可能な範囲内で、鉄道施設（駅、車両基地、換気施設）の供用による温室効果ガスに係る環境影響を回避又は低減することを目的として、環境保全措置の検討を行った。

環境保全措置の検討の状況を表 8-6-2-14 に示す。

表 8-6-2-14 環境保全措置の検討の状況

環境保全措置	実施の適否	適否の理由
省エネルギー型製品の導入	適	省エネルギー型製品の導入により、発生する温室効果ガスの排出量を低減できるため、環境保全措置として採用する。
温室効果ガスの排出抑制に留意した施設の整備及び管理	適	温室効果ガスの排出抑制に留意した施設の整備及び管理を行うことにより、温室効果ガスの排出量を低減できるため、環境保全措置として採用する。
設備機器の点検・整備による性能維持	適	法令上の定めによる定期的な点検や日々の点検・整備により設備機器の性能を維持することで、温室効果ガスの排出量を低減できるため、環境保全措置として採用する。
鉄道施設（車両基地）の緑化・植栽	適	鉄道施設（車両基地）に緑化・植栽をすることで、植物による温室効果ガスの吸収により、温室効果ガスの排出量を低減できるため、環境保全措置として採用する。
廃棄物の分別・再資源化	適	分別回収施設の設置や利用者への周知を行い、分別、再資源化の徹底を図ることで、取り扱う廃棄物の量を低減できることから、温室効果ガスの排出量を低減できるため、環境保全措置として採用する。
廃棄物の処理・処分の円滑化	適	廃棄物保管場所について、利用者の利便性や収集作業の効率性を考慮した配置とするとともに、仕切りの設置、色彩または形状の工夫等で区別しやすいようにすることにより、廃棄物の処理、処分の円滑化を図ることで、分別、再資源化及び適正処理を徹底することができ、取り扱う廃棄物の量を低減できることから、温室効果ガスの排出量を低減できるため、環境保全措置として採用する。

4) 環境保全措置の実施主体、方法その他の環境保全措置の実施の内容

本事業では、鉄道施設（駅、車両基地、換気施設）の供用による温室効果ガスに係る環境影響を低減させるため、環境保全措置として「省エネルギー型製品の導入」、「温室効果ガスの排出抑制に留意した施設の整備や管理」、「設備機器の点検・整備による性能維持」、「鉄道施設（車両基地）の緑化・植栽」、「廃棄物の分別・再資源化」及び「廃棄物の処理・処分の円滑化」を実施する。

環境保全措置の内容を表 8-6-2-15 に示す。

表 8-6-2-15(1) 環境保全措置の内容

実施主体	東海旅客鉄道株式会社	
実施内容	種類・方法	省エネルギー型製品の導入
	位置・範囲	鉄道施設（駅、車両基地、換気施設）
	時期・期間	供用時
環境保全措置の効果	省エネルギー型製品の導入により、温室効果ガスの排出量を低減できる。	
効果への不確実性	なし	
他の環境への影響	なし	

**表 8-6-2-15(2) 環境保全措置の内容**

実施主体	東海旅客鉄道株式会社	
実施内容	種類・方法	温室効果ガスの排出抑制に留意した施設の整備及び管理
	位置・範囲	鉄道施設（駅、車両基地、換気施設）
	時期・期間	供用時
環境保全措置の効果	温室効果ガスの排出抑制に留意した施設の整備及び管理を行うことにより、温室効果ガスの排出量を低減できる。	
効果への不確実性	なし	
他の環境への影響	なし	

**表 8-6-2-15(3) 環境保全措置の内容**

実施主体	東海旅客鉄道株式会社	
実施内容	種類・方法	設備機器の点検・整備による性能維持
	位置・範囲	鉄道施設（駅、車両基地、換気施設）
	時期・期間	供用時
環境保全措置の効果	法令上の定めによる定期的な点検や日々の点検・整備により設備機器の性能を維持することで、温室効果ガスの排出量を低減できる。	
効果への不確実性	なし	
他の環境への影響	なし	

**表 8-6-2-15(4) 環境保全措置の内容**

実施主体	東海旅客鉄道株式会社	
実施内容	種類・方法	鉄道施設（車両基地）の緑化・植栽
	位置・範囲	鉄道施設（車両基地）
	時期・期間	供用時
環境保全措置の効果	鉄道施設（車両基地）に緑化・植栽をすることで、植物による温室効果ガスの吸収により、温室効果ガスの排出量を低減できる。	
効果への不確実性	なし	
他の環境への影響	なし	

**表 8-6-2-15(5) 環境保全措置の内容**

実施主体	東海旅客鉄道株式会社	
実施内容	種類・方法	廃棄物の分別・再資源化
	位置・範囲	鉄道施設（駅、車両基地）
	時期・期間	供用時
環境保全措置の効果	分別回収施設の設置や利用者への周知を行い、分別、再資源化の徹底を図ることで、取り扱う廃棄物の量を低減できることから、温室効果ガスの排出量を低減できる。	
効果への不確実性	なし	
他の環境への影響	なし	

表 8-6-2-15(6) 環境保全措置の内容

実施主体	東海旅客鉄道株式会社	
実施内容	種類・方法	廃棄物の処理、処分の円滑化
	位置・範囲	鉄道施設（駅、車両基地）
	時期・期間	供用時
環境保全措置の効果	廃棄物保管場所について、利用者の利便性や収集作業の効率性を考慮した配置とするとともに、仕切りの設置、色彩または形状の工夫等で区別しやすいようにすることにより、廃棄物の処理、処分の円滑化を図ることで、分別、再資源化及び適正処理を徹底することができ、取り扱う廃棄物の量を低減できることから、温室効果ガスの排出量を低減できる。	
効果への不確実性	なし	
他の環境への影響	なし	

ウ) 環境保全措置の効果及び該当環境保全措置を講じた後の環境の変化の状況

環境保全措置の効果を表 8-6-2-15 に示す。環境保全措置を実施することで、鉄道施設（駅、車両基地、換気施設）の供用による温室効果ガスに係る環境影響が低減される。

ウ. 事後調査

予測手法は温室効果ガスの排出量を定量的に予測するものであり、予測の不確実性は小さいこと、また採用した環境保全措置についても効果に係る知見が蓄積されていると判断できることから、環境影響評価法に基づく事後調査は実施しない。

エ. 評価

7) 評価の手法

a) 回避又は低減に係る評価

調査・予測結果及び環境保全措置の検討を行った結果について、事業者により実行可能な範囲内で回避又は低減がなされているか、見解を明らかにすることにより行った。

1) 評価結果

a) 回避又は低減に係る評価

本事業では、鉄道施設（駅、車両基地、換気施設）の供用に伴う温室効果ガスが発生するものの、「省エネルギー型製品の導入」、「温室効果ガスの排出抑制に留意した施設の整備及び管理」、「設備機器の点検・整備による性能維持」、「鉄道施設（車両基地）の緑化・植栽」、「廃棄物の分別・再資源化」及び「廃棄物の処理・処分の円滑化」の環境保全措置を確実に実施することから、温室効果ガスに係る環境影響の低減が図られていると評価する。